

(一)

元治元年七月十九日（一八六四年八月二十日）、京・烏丸通り三条。

火事だ。大火事だ。

通りに面した家々から、紅蓮の炎がたちのぼる。焼け出された人々が、迫りくる火に逃げ惑い、広い通りは阿鼻叫喚の地獄と化していた。

「倒れるぞ」

誰かが叫ぶ。その直後、通りに面した大きな商家が、ゴーツという凄まじい音を立てて崩れ落ちた。

「あつ」

加代は、恐怖のあまり足がすくみ、その場に立ち尽くした。火のついた太い柱が、加代をめぐって倒れてくる。

「もう、あかん」

加代は目をつむった。

その時、

「あぶない」

という声とともに、加代は誰かに背中を強く押され、五尺ほど前に飛んだ。間を置かず、真っ赤に焼けた柱が轟音とともに落ちる。倒れ込んだ加代の足との距離は五尺、もしあのまま立ち尽くしていたら、焼けた柱の直撃を受けていたところだ。

「大丈夫か」

若い武士が倒れた加代を抱き起し、

「走れるか」

と尋ねる。加代が頷くと、若い武士は無言で頷き返し、加代の手を取って走った。

どんどん焼け。

前年の八月十八日の政変で京を追われた長州藩が、失地回復とばかりに攻め上り、会津藩をはじめとする幕府軍との間で繰り広げた

市街戦、世に言う「禁門の変」により起きた大火事だ。幕府方の砲撃によるとも、長州兵が逃げる際に放った火によるともいわれている。当時の洛中にあつた家屋の約半数が焼失したという。

衣棚町で古着屋を営む加代の家も、例外ではなかった。

暮れ六つ少し前、数軒先の家が燃え始めたことに気が付いてから、あつという間に裏の倉に火が付いた。見る見るうちに火が迫り、時を置かず母屋が燃え始めた。加代は両親とともに、着の身着のまま何も持たずに逃げた。逃げるうち両親とはぐれ、気づいたらまわりに知り合いは一人もいなくなっていた。

加代は走った。隣を走る若い武士に手を引かれるままに、ただただ走った。

(二)

まだ遠くの空は赤い。が、近くの火は鎮まったようだ。

一夜明けた朝四つ過ぎ。

焼け残った寺の境内に、焼け出された多くの人々が、疲れ切った様子でへたり込んでいる。親にはぐれたらしい子供もそここに見られるが、どの子供ももう泣き叫ぶ気力もないようだ。周りの大人と同じように、茫然とした表情で地べたに座っていた。

やるせない静寂だ。

だが一方、他の一角では、幸運にも難を逃れた家の女人たちであろうか、もう炊き出しを始めている。大鍋の中で煮え立つ雑炊の香りがあたりに漂っていた。

本堂の縁側に腰かけてぼんやりと遠くの空を眺めていた加代のところに、昨夜の若い武士が雑炊の入った椀を二つ持ってやってきて、その一つを加代に渡した。

「おおきに」

加代が受け取ると若い武士は、黙って加代の隣に腰を掛け、雑炊を食べ始めた。

(彦三郎さま)

加代は、若い武士をじつと見つめた。

田中彦三郎、それが彼の名前だった。昨日ここへ来て一息ついたところで名乗りあつた。桑名藩士だそうだ。戦いに参加しているはずの桑名藩の侍が何故あんなところに居たのか、不思議に思わぬではなかったが、加代はその訳を聞かなかつた。なんとなく聞いてはいけない気がしたので。

歳は、加代より四つ上の二十歳。優しげで長州藩士相手に戦う姿など、加代にはとても想像できない。

(戦が嫌で逃げてきはつたんやろか)

加代はふと、そんな気がした。

彦三郎は黙々と雑炊をほおぼっている。加代はその姿をいとしげにじつと見つめた。その彦三郎のうなじには、大きな赤い蝶の形をした痣があつた。

「近江屋の加代はいまへんやろか。今年十六になる私どもの娘でございます。だれか見かけたお人は居はらしまへんやろか」

寺の門の方から、懐かしい声が聞こえた。

加代が声の方を見ると、父親の近江屋佐兵衛と母親の志摩だ。おろおろと、目に入る人毎に訊いて回っている。

「おかあはん、おとうはん」

加代は二人に駆け寄つた。

「お加代、無事でしたんか。あんさん、お加代が、お加代が」

志摩が加代を抱き寄せ、佐兵衛を呼ぶ。

「おお、よう無事でおつてくれた。よう無事でおつてくれた」

佐兵衛も加わり三人、暫し泣きながら抱き合つた。

やがてお加代が顔を上げ、

「あそこに居てはるお侍はんに助けてもらたん。おとうはん、おかあはんからも、御礼言

うて」

さつきまで彦三郎と一緒に居たところを指さした。

「え、どこに居てはるんや」

佐兵衛があたりをみまわす。

「ほら、あそこ、あれっ」

居ない。さつきまで黙々と雑炊をほおぼつていた彦三郎が居なくなっているのだ。

「どこ行かはつたんやろ」

加代があたりを見回したが、彦三郎の姿は見えない。

「彦三郎さま、田中彦三郎さま」

加代は寺中探しまわつた。だが、彦三郎はどこにも居なかつた。

「桑名藩の田中彦三郎さまとわかつてるのや。改めて御礼に伺えはええやないか」

しよげかえる加代を、佐兵衛と志摩がなだめて、その日は山科の志摩の実家に帰つたのだった。

後日、親子三人連れ立って桑名藩邸に礼に行つたが、国許に帰つて、もう京にはいないということだった。加代は何度も何度も手紙を出したが、返事は一度も来なかつた。そうこうしているうちに、御一新。世の中がひっくり返つた。落ち着いたころ、伊勢参りにかこつて、桑名へ行つてみたが、田中彦三郎という桑名藩士の消息はわからなかつた。

結局、加代はその後一度も、彦三郎と会うことはできなかった。

加代は、彦三郎のことが忘れられず、来る縁談すべて断り続け、失意のうちに病を得て、二十二歳の若さで亡くなつた。

(三)

アスファルト照り返しで、四十度は優に超えているだろう。

令和元年八月二十日。

地球温暖化は真実のようだ。梅雨明け以来、正気の沙汰ではないような暑さが続く。

「僕の前世も見えるん」

マスターの北川が面白そうに訊いた。

四条河原町の喫茶店「蝶」では、常連客の丸山弘子がカウンター席に座り、マスターの北川と談笑している。

弘子は他人の前世が見えるのだという。北川は、全く信用してはいない。といって、その手の話は嫌いではなかった。カウンター越しに客と話す暑さしのぎの気楽な話として楽しむのにはちょうど良い。

話を振られた弘子の、

「うん、見えるよ。四人見える。フランス人とアメリカ人。それに日本人が二人、直近は、明治時代の日本人。学校の先生やったみたい」という応えに、

「なんか、にわかには信じられへんなあ」と、北川は笑った。

弘子は近所の弁護士事務所に勤める三十路を少し過ぎた事務員だ。職場が職場だけに、彼女の話は面白い。相談に来る客の前世も見えてしまうそうだ。彼女が言うには、離婚の相談に来る客は必ずと言っていいほど、前世も配偶者運に恵まれていないらしい。

「前世がわかったところで、まさか、前世で配偶者と縁がうすかったから、現世では気が付いてとは言えんしな。まあ、ここでひとつの面白い話として楽しんでもらえばええよ」

弘子は北川の心を見抜いているようだ。

「そやな」

北川が答え、弘子の前のカップにコーヒーを注いだ。

ピンポンピンポンピンポン

入り口の開く音がして、高校生くらいの少女が入ってきた。

「いらっしやい」

北川が反射的に挨拶をしたが、少女を見て

もう一度、今度は親しみを込めたように、

「いらっしやい」

と言った。

少女は少しはにかんだ様子で北川に会釈し、

「アイスコーヒーを」

と一言言っ、窓際の席に座った。

「常連さん？」

弘子が尋ねる。

「夏休みが始まったところから、ほぼ、毎日。

あれ、一緒になったことなかったっけ」

「うん、初めて見る子やわ。時間が違うんや

ろ。私、今日、いつもより早いさかい。かい

らし子やなあ」

「見た目もかわいらしいけど、中身、もつと

かわいいんや」

「どういこと」

「弘子さん、ここで会ったことなかったかな

あ、京大の久保くん」

「ああ、二、三回、会ったことあるわ、夏でもスカーフ首に巻いてるイケメン」

「そうそう」

「その久保くんがどうしたん」

「あの子、久保君くんにはほの字らしい」

「ほの字でまた、マスター、古いなあ」

「いや、あの子見てたら、そんな表現つかい

となるんやて。毎日ああして、久保くんの来

るの待ってて、久保くんが来ると、本人には

わからんようにじーっと見つめて、久保くん

が帰ると、深い溜息ひとつついて、ほんで

出ていくんや」

「へえ、今どき珍しい子やなあ」

「そやろ」

弘子と話しながら作っていたアイスコーヒーが出来上がった。それをもって窓際の席へ歩いて行った北川を目で追った弘子は、改めて少女を見て、

「あれっ」

と、小さく叫んだ。

見えない。少女の前世が見えないのだ。

(なんでやろ、なんで、あの子の前世が見え

へんのやろ」

弘子は首をひねった。

「今まで、こんなこと一度もなかったのに」

「どうかしたんか」

アイスコーヒーを出し終えてカウンターへ帰ってきた北川が、弘子の様子をいぶかって尋ねた。

「見えへんのよ」

弘子が答える。

「何が」

「前世、あの子の前世が全く見えへんの」

弘子が少しいらだったように言う。

「まあ、そんなこともあるやろ」

マスターがのんきな声で応えた。

（おかしい）

弘子はしばらく考えているようだったが、

「ほやけど、ほぼ毎日来てて、久保くんて毎日来るわけやないやろ」

気を取り直したように訊く。

「三日にいっぺんくらいかな。ほやから、あとの二日待ちぼうけ」

北川が、その時の少女を思い出したのか、いかにも気の毒そうに応えると、

「なんや、かわいそなつてきたわ」

弘子も声を落とした。

その日は、あとの二日の方だったらしい。

まちぼうけ。

久保は来なかった。

少女は、二時間待って帰って行った。

「かわいそうに。マスター、仲とりもってあげたらええのに」

二時間、何となく少女のことが気になって帰りそびれた弘子が言った。

「ぼくも、そう思ったこともあるんやけど、加代ちゃん、あ、あの子、石原加代子いうんやけど、加代ちゃんの純な様子見てたら、不純なおっさんが下手にかかわったらあかんような気がしてな」

北川がしみじみとした口調で言う。

「そういうもんかも知れへんなあ」

弘子も静かに言って、

「さて、私も帰るわ、思わん長居してしもた」

と、立ち上がり、

「おおきに。気をつけて」

という、北川の声に送られて帰って行った。

（四）

（今日も確かめられへんかった）

四条通りを西へ歩きながら、石原加代子は、深い溜息をついた。しかし、表情はそれほど深刻ではない。

（明日がある、明日がだめでも明後日がある。今更、急いだりせえへん）

近くの高校に通う加代子が久保に初めて会ったのは、建てられたばかりの祇園祭の山鉦を見て歩いていた七月の十日過ぎ。「蝶」という名前が気になって、友達と入った喫茶店でのことだ。加代子たちより少し遅れて入ってきた大学生とおぼしき三人連れの一人だった。久保のことを一目見て、加代子の身体に衝撃が走った。探し続けていたものが目の前に現れた。そんな感じだった。

（うなじを見たい）

加代子は思った。

しかし加代子は、久保のうなじを見ることはできなかった。夏だというのに、久保は薄手のスカーフを首に巻いていた・

（一瞬でも、スカーフを取らばらへんか）

加代子は、久保をじっと見つめた。が、その日は結局、久保は一度もスカーフを取らなかった。

（どうしようか）

喫茶店を出ていく久保の後姿を目で追いながら、加代子は考えた。

（後を尾行けるか）

しかし、相手は長身の大学生。小柄な加代子には無理だ。コンパスが違いすぎる。それ

に今日は連れもいる。漏れ聞いたマスターとの会話で、彼がこの店の常連であることはわかった。

(よし、この店で待とう)

幸い夏休みも近い。授業も今日から短縮になった。

加代子は、その日から毎日、その店に通うようになった。

久保は、毎日は来ない。来ない日の方が多い。でも、来る日はある。一日おきか、二日おきか、待っていたら来るのだ。加代子は辛抱強く待った。

喫茶店に現れる久保は、いつもスカーフをしていた。店内でも取ることはない。

(何かの拍子に取らはらへんか)

加代子は久保を、期待を込めてじっと見つめるのだった。

今日も二時間待ったが、久保は現れなかった。昨日も会えていない。

(明日は来る)

キツと前を見て歩く加代子は、気が付けば、ほどなく烏丸通りだ、というところまで来ていた。

(いったい何をしているんだ、私は)

弘子は、加代子の後を尾行けている自分に問うた。

(ばかっている)

とは思う。でも気になる。

喫茶店「蝶」を出ると、先に出た加代子が前を歩いている。

(やっぱり見えへんわ)

どう目を凝らして見ても、加代子の前世が見えないのだ。こんなことは今までに一度もなかった。

(おかしい)

自分の力が衰えたのかとも思い、通りを行く人々に目を移すと、みんな背後に三、四人の前世を背負って歩いている。弘子の方に問

題はないようだ。

(あの子、前世がないんやろか)

とも思ってみるが、前世のない人間などいるのだろうか。

(わからない)

気が付いたら、弘子は加代子の後を尾行けていた。

加代子の後姿を見つめる弘子の目に、三歳くらいの男の子が走ってくるのが見えた。その子は何かに夢中になっているのか、周りが全く見えてないようだ。

「あ、危ない」

弘子が叫んだが、間に合わなかった。男の子は、加代子にぶつかり、転んだ。

「あらあら、大丈夫」

加代子が男の子を起こしてやって、

「怪我せえへんかったか」

聞きながら、男の子の身体を調べている。弘子も思わず駆け寄った。

「ごめんなさい」

男の子は、怪我もなく無事だったらしく、無謀に走ってきたことを謝った。

「ごめんなさいは、お姉ちゃんのほうが。ほんま、ごめんな、大丈夫やったか」

加代子が言うと、男の子は、こつくりと頷いた。

(よかった)

弘子がひとまず安心した時、

「あ、ああ」

加代子の悲痛な叫びが聞こえた。

(な、なに)

弘子が驚いて加代子を見ると、加代子が目を大きく見開き、男の子のうなじを凝視している。

「こんなことって」

加代子が小声でつぶやき始めた。

男の子は最初、不思議そうに加代子を見つめていたが、やがて、気味が悪そうにその場を走り去った。加代はそれにも気づかぬ態で、

つぶやき続ける。そのつぶやきがだんだんと大きくなっていった。

「こんなことって。こんなことって」

加代子は、ぶるぶると震えだし、その様子は尋常ではない。

「どうしたん。だいじょうぶ？」

見かねて弘子が声をかけるが、加代子はそれにも気づく様子がない。

「四回目、四回目なのに。百五十年で四回生まれ変わって、やっと、やっと見つけたと思ったら、あんな子供やなんて……。二十年ずれてる」

つぶやき続ける。

そのつぶやきを聞いた弘子は驚いた。

（百五十年で四回生まれ変わったって……。自覚しているんだ。そうか、そやから、前世が見えへんのか。すべてが彼女やから）

驚きであったが、納得もした。

突然顔を上げた加代子が、

「二十年……。そうだ、今からならまだ間に合う」

そういって、突然駆け出した。

（え、え、何）

わけのわからないまま、弘子が加代子の後を追う。

「ああああ、危ない」

弘子が叫んだ。

加代子が、車道に飛び出したのだ。

黒のセダンが加代子に迫る。けたたましいクラクションと空気を裂くようなブレーキの音があたりに鳴り響いた。

（轢かれた）

弘子が両手で目を覆おうとしたその時、若い男が車道に飛び出し、加代子を抱えると、そのまま向こう側の歩道に、ひらりと着地した。

「ああ、助かった」

安堵して一瞬膝から崩れ落ちた弘子が、立ち上がり、信号が変わるのを待って、車道を渡っていく。

その先の歩道では、

「大丈夫か」

若い男が、抱えたままの加代子の顔をのぞき込んだ。

「あなたは……」

加代子が驚いた様子だ。

そう、若い男。それは久保だった。

「えつ、あつ、あんた、茶店でよう見かける子やんか」

久保がそう応じたとき、彼の首に巻かれたスカーフが風に飛んだ。

「あつ」

彼は、スカーフを追うように振り返った。

その時、加代子を見た。彼のうなじに、赤い蝶の形をした痣があることを。

「彦三郎さま」

加代子はそうつぶやくと、久保の腕の中で意識を失くした。

（久保くん……）

少し離れて、その一部始終を見ていた弘子は、久保の背後に二代前の前世、若い武士、田中彦三郎が普段よりはつきりと輝くように見えていた。

（五）

「マスター、まだ信じてないやろ」

弘子が、からかうように言った。

三日後の夕方、喫茶店「蝶」。

あの日、あれから、弘子は、久保と一緒に取り敢えず、加代子を病院に連れて行った。何の心配もないという診断を受けて、

「久保くん、この子うちまで送ったってよ」と、久保にその後を任せた。弘子にしてみれば、氣を利かせたつもりだ。事情はわからないが、百五十年越しの想い、何としても成り立たせてやりたいではないか。  
（あのふたり、どうなったか）  
気になって、次の日「蝶」へ来てマスター

に訊いたが、

「加代ちゃん、今日はきてへんわ。なんぞあつたんかなあ」

と心配している。

「マスター、実はな……」

弘子が、前日に見たことを話すが、北川は、「へえー」

と、感心したような返事はするものの、全く信用していないようだ。

その次の日も、加代子は、「蝶」に顔を見せなかった。

そして三日目の今日、弘子が「蝶」に入ると、北川が笑顔で、

「弘子さん、あれ」

窓際の席を指した。

「うん？」

弘子が見ると、そこには、久保と加代子が向かい合つて座っている。誰が見ても、仲のいいカップルだ。

「へえ、ええ雰囲気やん」

弘子が満足そうに微笑んだ。

「加代ちゃん、嬉しそうや」

北川がホツとしたようにつぶやく。

「百五十年越しの恋か」

弘子がしみじみと言い、

「マスター、また信じてないやろ」

と、からかうように言ったのだった。

「こう目の前で見せられてはなあ」

北川は困惑したように言う。

「信じる？」

弘子が答えを迫ると、

「何やよう、わからんようになってきた」

北川が苦笑した。

「蝶の痣がみえへんでも、何か感じるものがあったんやな、毎日ここへきて、久保くんがスカート取るの待ってたんや。痣が恥ずかしい言うて、ずっとスカートしとるやなんて、罪な男やで」

弘子が久保を非難するのを、

「おいおい、弘子さん、それ言うたら久保がかわいそうや。彼は何にも知らなかったんやから」

北川が庇う。

「あ、そうか、そらそやな」

弘子は加代子に肩入れしすぎている自分に気づき、きまり悪そうに笑った。

「それはそうと、男の子の痣、あれは、どう説明がつくねん」

何とか百五十年越しの恋の話を、若い娘の思い込みと偶然が重なったものとして理解したい北川が、抵抗の糸口を見つけて尋ねるが、

「ああ、あれなあ。あれ、痣やなかった」

と、弘子に簡単に返された。

「痣やなかったて」

「うん、あれ、シールやってん」

さらりと応える弘子に、

「へええ」

と、納得しかけた北川だが、

「弘子さん、わざわざ確かめたんか」

とあきれ顔で問う。

「うん、近所の子やろとあたりをつけて探したら簡単に見つかったわ。もうその時にはうなじ、きれいなもんやった、ほんで、そばにはつたお母さんに訊いたら、四年生のお姉ちゃんのきれいなアゲハ蝶のシールにケチャップこぼしてしても、怒ったお姉ちゃんに貼られたいうことらしい」

「また偶然にしても、ややこしとここに貼ったもんやなあ」

「ほんまやで、そのせいで加代ちゃん、死のうとまでしたんやから」

弘子が三日前のことを思い出したうように、表情を曇らせた。

「それに久保くんが出くわして、助けた。運命というか何というか」

溜息をつく北川に、

「お、だんだん信じてきたやん」

と、弘子が面白そうに笑う。

北川は何か言い返そうとするが、言葉が見

つからず、黙った。と言って、不快そうではない、それどころか、どこか嬉しそうだ。

「マスター、ごちそうさん」

久保と加代子がレジの前に立った。

「おおきに」

マスターの聲に送られて、久保の後について出ていく加代子に、弘子がさっと寄り添い、耳元で、

「今度こそ、しつかり捕まえて、離したらあかんよ」

と、ささやいた。すると加代子は、

「うん」

と、小声で応え、はにかんだように、微笑んだ。その加代子の背後に、四人の若い女性を弘子は、はっきりと見た。それは、加代子が自覚していた彼女の前世だろう。

(これで、加代ちゃんだけ、石原加代子としてだけの人生が生きられるんや)

どういうことか、本当のところは何もわからないが、なぜか弘子は、確信をもってそう思えた。

先に外へ出た久保が、振り返らずにそっと手を出す。後ろから加代子がためらいがちにその手を握った。

黄昏の時。

暑さの中、涼風が一瞬、若い二人のほほを撫でていった。